

プレス空知 2017年4月号

4月は、新年度が始まり、なんとなくうきうきする時期ですが、新しい生活に戸惑いもあり、不安や心配をしてしまうころでもありますね。今月は、ベートーヴェンの人生についてお話します。ベートーヴェンは、「難聴」だったことが特に有名ですが、他にも親族との確執や慢性的な胃腸病に生涯悩まされました。さまざまな苦悩を音楽によって克服した作曲家といえるでしょう。

ベートーヴェンは、21歳でドイツの小都市ボンから、音楽の都ウィーンに留学し、貴族の手厚い支援を受け、ウィーンという新しい土地でも才能を認められました。しかし、まだ28歳のとき、自分の耳の不調に気がつきます。当時住んでいた住居のすぐそばに教会があり、毎時、時を告げる鐘の音が聞こえないことがあることから、自分の耳が聞こえにくくなっていることがわかったといわれています。ピアノの名手で、即興演奏に優れ、次々と作品を発表する若きホープであったベートーヴェンは、大きな挫折を感じます。音楽家にとって「難聴」は致命的なハンディとなります。まだ始まったばかりの新天地での音楽家としての活動に大きな不安にさいなまれます。その時に作曲した曲が、「悲愴」ソナタでした。ベートーヴェンは、絶対音楽の作曲家で、作品にほとんど標題をつけることはありませんでした。しかし、いくつかの例外があるのですが、この「悲愴」ソナタがその例外の一つです。ベートーヴェンは、1798年、このソナタを作曲し、題名を「大ソナタ悲愴」と書いたのです。この曲は、ハ短調という調性で、ベートーヴェンにとって重要な調性で書かれています。ヨーロッパでは、調性に意味を持たせており、「ハ短調」は、苦悩からの再生という意味を持つといわれています。ベートーヴェンは、「運命」交響曲や最後のピアノソナタ作品111などの重要な作品で「ハ短調」を採用しています。

悲愴ソナタは、当時としてはたいへん斬新な構成で作曲されていて、曲の冒頭に「重々しく」と指示されたゆっくりとしたテンポの長い前奏があります。その前奏部分が、まさに「悲愴」で、小さな休符を挟んで慟哭を表現しています。その前奏部分が速いテンポになることを予感させながら終わると、堰を切ったようなスピード感のある第一テーマが現れます。大きな苦悩に深く悩みながら、その苦悩に打ち勝ち、また、再生するという力強さがみなぎった曲想に変わります。この第一楽章ですでに苦悩から立ち直っていることを感じさせます。この曲は、3つの楽章から成っており、第二楽章は、「愛のメロディ」と後世に名づけられ、今では、CMなどにも取り入れられる、優美なメロディで有名になっています。ベートーヴェンは、耳の不調に気づいたこの最初の挫折から、「悲愴」を作曲することで立ち直ります。しかし、難聴は刻一刻と悪化し、晩年はほとんど聴こえなかったといわれています。ベートーヴェンは、57年の生涯で、150曲近い作品を残しています。耳が聞こえなくとも、作曲はできるのです。ベートーヴェンの頭の中には、常に音楽が鳴り響き、音楽家として致命的と一般的には考えられる難聴にもめげず、たくさん作品をかき続けた作曲家でした。諦めないことが、ベートーヴェンの信条だったことがわかります。私にとっても、見習いたい、尊敬する作曲家です。

